朝刊 2016/05/26 28面
（第３種郵便物認可）

交流農家に食で恩返し

美浜で移住体験 都会５人

1日限定飲食店 プロの腕振るう

美浜町久々子に開所した移住居住交流体験施設「蒼舎（そうしゃ）」で生活していた都会の若者が、25日に2週間の日程を終えた。東京で飲食業に携わる5人は、農作業に汗を流し、美浜町にすっかりほれ込んだ。22日夜には地元の農家に感謝の気持ちを伝えようと、一日限定の〝飲食店〟を開いた。（西田光）

農家に感謝の気持ちを伝えようと東京の若者が企画した「なかめのてっぺん美浜店」＝22日夜、美浜町久々子の移住居住交流体験施設「蒼舎」

暮らしていたのは、首都圏で飲食店を展開する「MUGEN」の10～30代の男女社員5人。同社が美浜町産のコメを使っている縁で、農家の農業にかける思いや大変さを知り、来店するお客さんにも伝えていこうと、体験を希望した。

蒼舎は美浜町への移住につなげようと、地元NPOが古民家を改修して12日にオープンした施設で、5人もこの日から住み始めた。1人ずつ町内の農家について、肥料を運んだり土を耕したりして毎日汗だくになりながら作業した。

田植えの繁忙期にもかかわらず温かく迎えてくれたことや、基礎からさまざまなことを教えてくれたことに恩返しをし、自分たちの仕事ぶりも見てもらおうと、限定の店をオープンすることにした。

店の名前は、同社の展開する店名にちなんで「なかめのてっぺん美浜店」にした。蒼舎前の広場でテーブルやイスを並べただけだが、5人の若者たちは黒い半袖シャツに前掛けのそろいのユニホーム姿で、威勢の良い掛け声で接客した。

テーブルには、町で捕れた新鮮な魚などを使った料理がずらり。腕によりをかけてつくった。お世話になった農家ら約40人が続々訪れ、満席になった。

農家の岡部哲章さん（54）は「みんな良く頑張ってくれた」と満足そう。都会の若者たちの考えに触れたことで「いい刺激になった。生産者側からも取り引きのある首都圏に対して何か働きかけができないかと考えるようになった」と笑顔で話していた。

若者たちは今後も美浜での経験をSNSで紹介したり、引き続き各農家らと連絡を取りあって都内の情報を提供していくという。

リーダーの金井正志さん（31）は「ここでの生活をどんどん都内の店でお客さんに話し、僕たちと同じように美浜のことを好きになってもらいたい」と話していた。